

外側から見た日本の農村

明の星女子短期大学 マリー ガボリオ

私が初めて庄内平野と出会ったのはもう10年以前、東北大学に留学していた時でした。それ以来庄内の田園風景は忘れられないものとなりました。鳥海山や最上川の自然が生み出す美しさ、水田の海に島のように浮かぶ村々、素晴らしい農家のたたずまい、そこで暮らしている人々のことはいつでも思い出されます。この景観を深く読めば、そこで生きている人々の生き方がよく分かります。私が特に強い印象を受けたのは水田の広がる夏の鮮やかな田園風景を見たときでした。それは日本人達には見慣れたものでしょうが、私にはなじみのない景色でした。日本はモンスーンアジアの一部であり、日本文化の基盤が稲作にあることは前から知っていましたが、風景は文化的アイデンティティのたしかな指標であるばかりでなく、さらにこのアイデンティティを保証するものもある、それを初めて実感しました。昔から村を形成している”家”は、世代を越えて次々に引き継がれ、時の連続性を深く感じさせます。また、この地域の歴史的遺産は、現代の農業などにも大きな影響を与えています。明治時代に基盤整備と水利事業がすでに行なわれ、また交換分合が第二次世界大戦中、及び農地改革直後に行なわれ、そして基盤整備はつい数年前にも繰り返し行なわれました。その結果、水田の風景を見ると、以前の世代の遺産がよく読み取れます。しかしながら一戸あたりの経営面積が比較的大きく、また生産性が高いとはいえ、現在の国際、国内状況のなかで、稲作農家は複合化経営を進めなければなりません。兼業化が進み、村と村人の生活も少しづつ変化してきました。

その後、私が山形県の酒田市北平田地区、特に新青渡集落（57戸）を中心とする農村調査を始めたのも、日本社会の構造とそれに基づく人間関係の原点が農村にあり、その歴史を研究することで日本の土着文化をより深く理解できるとの動機からでした。新青渡は、1954年に合併された酒田市の東、7キロメートルに位置する、庄内平野の典型的な稲作の村です。特に稲作の発展に伴う農村の変化を戦後から今日まで跡付けるのが狙いでした。一年に何回も、自分の目と耳による調査を行ないました。ある時は、村の人の家に泊めていただくこともあり、農家の生活を直接肌で感じる機会にも恵まれました。最初は方言や、地域の歴史についての知識が不足していたこともあります。いろいろな問題にぶつかったことも事実です。しかし村の人々が、初めて会った私を温かく迎えてくれ、すぐに打ち解けてくれたのは、とても幸運でした。

実際に村に入ってから、とても興味深く思ったのは、特に、村の構造、即ち、農業の面と各家の日常生活面での”家”的組織のことでした。初めてその村で調査させていただいた時、村人同士で話をするのに、ほとんど相手の名前を使わず、屋号を使っているのです。最初は村の人々の本当の名前と屋号を照合しなければならなかったのでとても苦労でしたがそのおかげで村における”家”と”家”との関係などに深い関心を持つことができました。日本の農村研究の重要性、又その面白さは2年前亡くなられた田原音和先生が教えてくださったのです。これからも、日本の村をずっと歩きつづけたいと思います。またそのような調査を通じて、フランスと日本の農村の相違点と類似点や、又今後の村の役割と行方についての理解を更に深めたいと思います。